

上野廃寺跡



雑木林の中、処々に礎石が点在する。地形の制限から講堂を西に配置する薬師寺式伽藍配置で東西塔が並び建つ。「靈異記」にいう観規の建立か。

- ウォークコース
- 南海道
- 灌漑用水路
- 万葉故地
- 道標
- 城跡
- 公園・緑地
- 国道
- 県道
- 駅
- 学校
- 寺
- 神社
- 見どころ

0 500m

根来寺大塔



宝塔の姿をもつ木造の塔としてはわが国最大・最古のもので総高は36mある。明応5年(1496)に心柱を立て、天文16年(1547)に完成したことがわかっている。国宝。

到着

JR紀伊駅

3.0km
60分

遍照寺(山口御殿跡)

3.0km
60分

山崎神社鳥居前

0.7km
14分

増田家住宅
桃井家住宅

4.2km
84分

西国分塔跡

1.8km
36分

出発

JR下井阪駅

コース

4

白鳳寺院跡を訪ねる

壬申の乱(672)の後、天武・持統天皇の治世(白鳳時代)には地方の豪族によって多くの寺院が建立されました。南海道が建設された頃には紀伊国にも多くの寺院がありました。南海道を踏襲した直線指向の道を歩き、沿線の寺社および寺院跡を訪ねます。



到着

出発

山口廃寺跡

周囲が開発されていない田園地帯にある。半地下式の可能性も残る塔心礎の心柱納穴の直径は約120cmで県下最大。五重塔であろうか。



増田家住宅

江戸時代初期から山崎組20ヶ村の大庄屋を務めた家柄の住宅。宝永3年(1706)に建てられた主屋(重要文化財)、宝暦9年(1759)の表門(重要文化財)は重厚な風格を持っている。



西国分塔跡

7世紀中頃、那賀郡の最有力氏族による建立で、北山廃寺跡・最上廃寺跡とともに四天王寺式伽藍配置をもつものと考えられる。塔心礎が露出する塔跡は国史跡。



白鳳寺院跡を訪ねる



天武・持統朝には全国に数多くの白鳳寺院が建立されました。紀の川流域も例外でなく伊都・那賀・名草郡で数ヶ寺が建立されました。

那賀郡の西国分廃寺跡、北山廃寺跡、最上廃寺跡は四天王寺式伽藍配置を採用し、坂田寺式の単弁8弁軒丸瓦を用いており、天武朝以前の建立とも考えられています。

名草郡の山口廃寺跡、上野廃寺跡、直川廃寺跡の軒瓦は法隆寺西院瓦の影響を受けた上野廃寺出土軒丸瓦の系統を示す7世紀末にちかい白鳳期のものです。ただ、山口廃寺跡からは単弁の軒丸瓦がわずかに出土しており注意を要します。



山口廃寺跡(左)と上野廃寺跡(右)出土の軒瓦

南海道はこれらの古代寺院の南側を西進するもので、雄ノ山峠から紀伊国へ入る道との交点には名草駅家、新萩原駅家が置かれたものとみられ、川辺遺跡、吉田遺跡、山一遺跡など関連遺跡が密に分布しています。

いにしえ人の信仰に触れる

西国分塔跡

紀伊国分寺を過ぎるとまもなく塔心礎が露呈する国史跡西国分塔跡に到着です。塔跡周辺の発掘調査からこの寺院跡は法隆寺式伽藍配置をもつ7世紀中頃創建の古代寺院と考えられ、全体を西国分廃寺跡と呼んでいます。8世紀、紀伊国分寺(僧寺)が興福寺式軒瓦を採用して建立されると西国分廃寺でも興福寺式軒瓦を用いて塔の再整備が行われており、聖武天皇の仏教政策とも関わりをもった有力な寺院であったと考えられます。

名草駅家と萩原駅家

さあ、出発しましょう。西国分塔跡からほぼ南海道にそって西行し山口廃寺跡を目指します。増田家住宅、山崎神社を経たところでウォークコースは南海道の南側を進むこととなります。途中雄ノ山峠から南下する道の交点付近は古代交通の要衝地で南海道名草駅家が置かれました。名草駅家の所在地も萩原駅家と同様に明確ではありませんが、周辺には山一遺跡、吉田遺跡など名草駅家が置かれた時期に重なる遺跡が点在しています。『日本後記』弘仁3年(812)には「紀伊国名草駅を廃し、さらに萩原駅を置く」とあり、この頃、名草駅家は廃止されたようですが、新たに萩原駅家が置かれたことが判ります。承和12年(845)の那賀郡司解(下級官庁から上級官庁へ出す書類)に「萩原村野田」の地名が見えることから、かつらぎ町萩原集落周辺に想定されている萩原駅ではなく、交通事情の変化から名草駅家周辺に駅家が造り直されたとする考えが支配的です。



吉田遺跡から名草駅家推定地への登り道

川辺遺跡

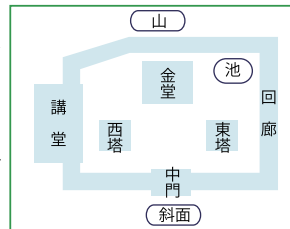
紀の川渡河地点に近い川辺遺跡では、24号バイパス建設工事に伴う発掘調査により8世紀後半に機能していたとみられる幅約8mの道跡が西北西へ30mにわたって検出されています。名草駅家に関係する道路の可能性がります。

山口廃寺跡

ウォークコースから名草駅家推定地を通り北へ足を延ばすと田園地帯の中に山口廃寺跡の塔心礎を見ることができます。交通の要衝を地盤とする有力氏族により建立されたとみられる古代寺院跡で、半地下式の可能性も残る塔心礎の心柱柄穴の直径は約120cmと県下最大で五重塔の可能性もあり建立氏族の信仰に掛ける情熱が伝わってくるようです。上野廃寺式軒丸瓦のほかに単弁蓮華文軒丸瓦が少数ながら採集されており、創建が遡る可能性もあり飛鳥寺院の地下式塔心礎に近い構造かもしれません。県下で唯一周囲が開発されていない田園地帯にあり今後の調査に期待がかけられます。

上野廃寺跡

山口廃寺跡の西方、JR阪和線の北側の丘陵裾部に上野廃寺跡が建立されました。新興住宅地を北へ進み松林寺手前の右側雑木林を西側へ細い登り道を辿れば東西塔、金堂基壇とその礎石が点在しています。薬師寺式伽藍配置では金堂の北側に講堂を配置するが、金堂の北側は高い崖となり堂塔を配置する余地が無いので、講堂は西塔の西側に東を正面に建立されています。基壇が低いため見落とすことがあるので注意が必要です。東西両塔の南側に中門があり、東西に延びる回廊のうち西回廊が講堂に取りつき、さらに金堂の北側で東回廊と繋がり東西塔と金堂を囲んでいます。このように伽藍を見ることができる廃寺跡は県下でも数少ないが、南門と東回廊の一部は周辺の住宅開発で消失してしまっています。上野廃寺式軒丸瓦のほかに新羅様式の軒丸瓦・軒平瓦が出土するところから『日本霊異記』下巻三十にみえる、俗称を三間名干岐ともいう老僧観規の建立になるものと考えられます。



上野廃寺伽藍配置図